

生の素材（落語を含む）を利用した実践活動の変遷と動向

— 学会誌『日本語教育』の調査結果に基づいて —

Review of the Journal “NIHONGO KYOIKU” from 1962~2016 with Special Reference to the Japanese Cultural Multimedia Presentations Found within - including Rakugo

森 真由美

Mayumi MORI

1. 本研究の目的

筆者は、大学などの高等教育機関の日本語教育の現場で、日本語および日本文化を同時に効率よく導入し学習者の5技能（4技能＋コミュニケーション能力）を促進する学習方法を探る目的から、落語を利用した教室活動を実践し、その有効性を分析・考察してきた。その教室活動においては、主に落語DVDを使用しているが、その落語DVDは日本語教育の教材として作成されたものではなく、一般に娯楽、鑑賞等を目的として作成されたものである。落語DVDを用いた本実践活動は、いわゆる教科書（テキスト）のような既に教材化されたものを利用せずに、新聞、小説、マンガ、アニメ、映画、TVニュース、TVドラマなどの「生の素材（教材化を目的に作られていないもの）」を利用した実践活動と同様である。筆者は、言語的および非言語的学習項目の理解に重点をおいて、この活動に取り組んでいる。

また同時に、筆者の取り組む落語を利用した活動は、言語的および非言語的学習項目の産出にも重点をおいている。この活動は、落語の小断口演という落語の特性を活かし、特にコミュニケーションに不可欠な言語および

非言語の情報を体感し身体全体で伝達する能力を促進することを目標にしており、スキット、演劇などを利用した実践活動と同様である。（但し、日本語教育の教科書中にある会話練習のためのスクリプトのように、既に日本語教育の教材として作成されたスクリプトを使用した活動は除く。）

本研究の目的は、上記に示したような「生の素材を利用した実践活動」の変遷を概観し、落語を教材として利用した本活動の位置づけを確認するとともに、実践方法の今後の動向を探ることである。

2. 『日本語教育』における生の素材を利用した実践活動の動向調査

2.1 調査対象

本稿では「生の素材を利用した実践活動」の動向を概観するために、日本語教育学会発行の季刊誌『日本語教育』を取りあげた。この『日本語教育』は日本語教育界で最も権威があり読者数が多いといわれる雑誌である。具体的な調査対象は、日本語教育学会誌『日本語教育』（1962年創刊号～2016年170号）

に掲載された論文¹と春季大会・秋季大会および研究集会発表の要旨²、日本語教育学会春・秋大会予稿集（2011春～2016年秋）³、日本語教育学会公式HP掲載のWEB版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』⁴である。その中から、以下の3つを選択の条件として「生の素材を利用した実践活動」として抽出し、分析を試みた。

- ①高等教育機関における実践活動
- ②活動目標が学習者の日本語力や文化理解の促進など学習者主体に設定された実践活動
- ③上記①②のうち、活動形態や手順、学習者の反応などの記述があるもの

2.2 『日本語教育』における「生の素材を利用した実践活動」の年代別・ジャンル別分析

上記の方法で抽出した実践活動は53例⁵であった。ここでは本調査対象から抽出した「生の素材を利用した実践活動」53例を年代別（表1）およびジャンル別（表2）に分類し、その傾向を分析する。（なお、表1・表

2の下に【グラフI 生の素材を利用した実践活動の年代別・ジャンル別分析】を参考資料1として添付した。表1・表2と合わせて適宜参照いただきたい。）

表1 『日本語教育』における生の素材を利用した実践活動の年代別分析

	年代	実践数
①	1962~1969	1
②	1970~1979	3
③	1980~1989	3
④	1990~1999	14
⑤	2000~2009	17
⑥	2010~2016	15
		計 53

表2 『日本語教育』における生の素材を利用した実践活動のジャンル別分析⁶

	1962 1969	1970 1979	1980 1989	1990 1999	2000 2009	2010 2016	計
ラジオニュース		1		1			2
TVニュース		1			3	1	5
TVCM					1		1
TVドキュメント		2	1		2	1	6
TVドラマ		2		3	3	1	9
TVアニメ			1		2	1	4
映画	1				3	1	5
大学の講義 VTR				1			1
新聞				3		3	6
小説・エッセイ・ 絵本				4	1	2	7
マンガ					4	2	6
詩・短歌・歌				1			1
川柳・俳句				2	2	1	5
民話・昔話				3			3
落語						1	1
演劇シナリオ			1	1	1	3	6
計	1	6	3	19	22	17	68

¹ ここでの「論文」とは、『日本語教育』において「寄稿・研究論文」「調査報告」「実践報告」「研究ノート」等の名目の、いわゆる「(学術)論文」の体裁で記載されたものと定義する。

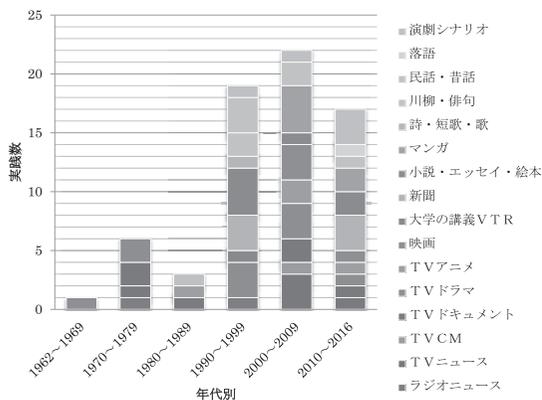
² 『日本語教育』における「春・秋大会・研究集会発表要旨」欄の掲載は42号（1980.10）～149号（2011. 8）である。

³ 本稿では、日本語教育学会発行の『日本語教育』中の論文・研究集会発表要旨を対象に調査したが、脚注2で述べたように「研究集会発表要旨」の記載が149号（2011）で終了しているため、その後の本調査対象の「実践活動」の動向を探るために、同学会主催の春秋大会の予稿集（2011春～2016秋）、同学会HP中の「WEB版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』」（2005～2016）をも調査対象とした。

⁴ 脚注3参照。『実践研究フォーラム』は研究集会委員会（関東地区）の開催で、日本語教育学会HP上で2005～2016年の実践報告を閲覧できる（2017. 3月現在）。

⁵ 本稿末の参考資料2【表『日本語教育』における生の素材を利用した実践活動（年代順）一覧】参照。

⁶ 表1の合計数を見ると、本調査で対象とした実践活動数の合計は53であるが、表2のジャンル別実践数の合計は68であり、合計数が異なっている。これは、例えば、一活動報告中に「新聞・小説」のように数種類のジャンルが報告されている場合があり、その場合、表2では「新聞」に1ポイント、「小説」に1ポイントとカウントした結果、表2の合計数が多くなったためである。



参考資料1 【グラフI 生の素材を利用した実践活動の年代別・ジャンル別分析】

2. 2. 1 1960年代の分析

表1の「①1960年代」の1実践例は、アメリカワシントン大学での、当時の日本語集中講座の活動報告（松田1967）である。筆者の調査によれば、『日本語教育』において、文化教育に触れた実践活動報告の記述はこの海外における活動報告が初めてである。そこではワシントン大学での一年間の日本語教育の活動（初・中級対象）が報告されており、当時の様子を垣間見ることができる。それによれば、当時は語学教育に重点が置かれ、文化教育に関しては「直接語学とは関係はないが」と断り書きがされた上で、日本文化紹介の映画⁷を見る時間（隔週2本ずつ約1時間）を設けていた。当時、海外の日本語学習者たちの日本に対するイメージは現実とはかけ離れていたため、映画を見せることが「日本文化の正確な理解を促す教材」として扱われたことが記されている。この記述から、1960年代当時の海外の日本語教育における「映画」の利用は単に文化紹介を目的として利用さ

⁷（松田1967）の記述によれば、ここでの「映画」は「総領事館から借りた日本紹介映画」ということなので、これがいわゆる娯楽を目的とした一般的な映画かどうかは判断できない。

れ、言語教育と文化教育は別々に切り離されて行われており、現在のように「映画」を言語・文化双方の教育を目的とした素材として利用していなかったことが分かる。

また、上記例のように、米国の大学の日本語授業に文化教育の素材として映画が使われたことは一般的ではなかったことが、池田（1968）の「米国の大学における日本語教育の特色」⁸と題した報告から分かる。池田は当時の米国の大学の（ある特定の大学ではなく）一般的な日本語教育の様子を紹介しているが、そこでは高度な日本文化理解のための活動として志賀直哉や川端康成などの小説の読解活動が紹介されており、映画鑑賞という視聴活動についての記述がないことから、当時は小説などの紙媒体を利用した文化教育が一般的であったことが分かる。

2. 2. 2 1970年代の分析

表1の「②1970年代」の3つの実践例は、いずれも生の視聴覚教材として主にTV番組を利用した報告である。これ以前は紙媒体の利用が大半を占めていたが、1970年頃からビデオカセットを使用した録画機やディスク式映像再生機（ビデオディスク）の開発が進められ⁹、家庭用VTR（ビデオテープレコーダー）の普及により語学教育にVTRを利用することが盛んになったことが背景にある。

3つの実践例は、東京外国語大学日本語学校での初級学習者を対象にTVニュース・ドキュメント・ドラマの視聴を利用して語彙・

⁸ ここで取り上げた、『日本語教育』11号に掲載された（池田1968）「米国の大学における日本語教育の特色」は、当時の米国の大学における日本語教育の一般論についての記述であり、本稿で調査対象とする具体的な実践活動の報告とは異なると判断したので、本稿では調査対象外として扱う。

⁹ 参考：井上智義編（1999）『視聴覚メディアと教育方法』p4「表1-1視聴覚メディアとテレビ・ラジオ放送の歴史」北大路書房

文型および聴解を指導する活動（吉岡1979）、早稲田大学に入学したての中級学習者を対象にTVドキュメントの視聴を利用して聴解および口頭表現を指導する活動（安藤1979）、アメリカの大学の上級クラスでのTVドラマを利用した話し言葉の聴解活動（佐久間1979）である。前二者は『日本語教育38号』で組まれた特集「日本語教育における視聴覚的方法」に寄せられたもので、当時、VTR機材の使用により、聴解・会話指導がそれまでより容易になったことや活動方法に広がりが生じたことが記されている。安藤（1979）は「それまで教科書でのみ日本語を学習してきた学習者は、生のテレビ番組から出てくる日本語に紙の上だけのことでなく生きたことばとして興味を示し、学習意欲が高まり効果的であった」と報告している。

佐久間（1979）も、「TVドラマを利用した理由として、アメリカでは学習者はレベルが上がるほど、その教材は学習者向けの特殊なものよりも多数の日本人一般が普通に楽しんでるものを好み、それが学習意欲の向上に重要な意味を持つ」と述べ、「生の素材」の有効性を指摘している。また、佐久間の活動は、上級クラスを対象として特に話し言葉の理解を目標に実践されたものであり、この頃から、日本語教育において今では一般的となっている話し言葉の教育が注目されるようになったことが分かる。これは、当時1974年発行の『日本語教育』23号で「進んだ段階における話し言葉の指導」という特集が組まれたことから推測できる。

文化教育の観点からいえば、生のTV番組を視聴することは、その社会・文化的背景の知識導入という文化教育とは切り離せない。また、映像の助けにより身振りや顔の表情、場面状況などの非言語的学習項目の導入が容易になる。しかし、上記3つの実践報告はど

れも言語教育を活動の主な目標として、文化教育を活動目標として特に明記していない。このことから、当時は依然として、言語と文化は別々に教育するものという意識があったことがうかがえる。

2. 2. 3 1980年代の分析

表1の「③1980年代」には3つの実践が行われている。その一つは、東北大学教養部の「日本事情」クラスでの、日本の伝統・歴史・文化・政治・経済・自然・科学技術などに関するTVドキュメントを視聴し意見感想を述べさせる活動（原土1988）である。二つ目は、京都外国語大学での、童話・時代劇・現代劇など演劇を手法に留学生間の協調性を培い、日本人のしぐさや習慣などの異文化理解と口頭能力促進を目指した課外活動（奥村1988）である。三つ目は、同じく京都外国語大学でのTVアニメ「サザエさん」の視聴を利用して文法理解・視聴解・口頭能力促進・文化理解を目指した活動（奥村1989）である。視聴覚教材としてアニメを利用することは今では珍しくないが、この頃よりアニメが取り上げられるようになったことが分かる。奥村（1989）はアニメ「サザエさん」を利用した理由を、ストーリー自体の面白さ、学習者の興味づけ、学習者の経験と重なるような内容、10分程度の話の長さ、日本の文化や伝統、教室では教えられない教育的要素があるとしている。また、奥村（1988）が実践した留学生による日本語劇上演という課外活動は、この後2000年以降に実践数が増える「日本語授業に演劇を取り入れた活動¹⁰」に繋がるものであろう。このように1980年代は実践報告数こそ少ないが、「生の素材」のジャンルが広がりがつつあることがうかがえる。

¹⁰「日本語授業に演劇を取り入れた活動」については、本稿2.2.5、2.2.6参照。

2. 2. 4 1990年代の分析

表1の「④1990年代」は実践例が14例と増え、素材のジャンルも、ラジオ、TVドラマ、新聞、小説・エッセイ・絵本、俳句、短歌・詩、民話・昔話、演劇シナリオ、大学の講義VTRなど様々である。このうち、この年代に初出する素材は、新聞、小説・エッセイ・絵本、俳句、短歌・詩、民話・昔話、大学の講義VTRである。それら活動例の一部を以下に提示する。

- (1) 新聞を利用したもの
 - a. (中川1994) 留学生の語学レベルに関係なく一般教養講座として異文化理解を目標にした活動
 - b. (町田1991) 海外の大学上級クラスでの4技能と実社会での人間関係や日本人の深層にある考え方も含めた異文化理解を目標にした活動
- (2) 小説・エッセイを利用したもの
 - c. (上山1990) アメリカの大学上級クラスでの読解授業において、文化面の知識を広げながら、楽しく読む、たくさん読む、速く読むことを目標にした活動
 - d. (上宮1994) 初級学習者を対象にショートストーリー（星新一他）や小説の抜粋を読み全体を要約することで、異文化理解を含む内容理解、読解力、作文力の向上を目標にした活動
- (3) 民話・昔話を利用したもの
 - e. (酒井1999) 日本人の風俗・習慣・考え方などを理解させる日本事情の授業
 - f. (古谷1996, 池田他1996) 昔話の視聴覚素材を利用した日本語および日本文化の授業
- (4) 俳句・短歌を利用したもの
 - g. (上迫1993, 佐藤1995) 初級後半・中級学習者を対象に俳句を利用して日

本語のリズムや文化を理解し俳句を作成することを目標にした活動

- h. (上宮1994) 初級学習者を対象に短歌を読解教材として利用する活動
- (3) 大学の講義VTRを利用したもの
 - i. (ピロッタ丸山他1992) 立教大学での上級クラスを対象に、経済法律等の社会系分野の「生の講義」を録画したVTRを利用して日本語の4技能と社会的・文化的背景の理解促進を目標とした活動

上記例には、現代日本事情の理解のために新聞を利用する活動（1）がある一方で、昔話や民話、俳句や短歌といった伝統的要素の強い素材を利用した活動（3）（4）がある。また、（5）の「生の講義」VTRというユニークな素材もあり、その活動では日本語授業と講義のギャップが埋められ、実際の講義を受ける際に、習得した技能がすぐに活かせることをねらいとしている。このように、この年代の傾向として、「生の素材」のジャンルがさらに広がりを見せたことを挙げる。

また、この年代のもう一つの傾向として、その活動目標の設定に変化が見られたことを指摘したい。以前は「語彙・文型」、「聴解」、「異文化理解」など、どちらかという、言語教育か文化教育の一方に重点を置いた目標設定をした活動が多かったように見受けられるが、この頃から「言語+文化」の総合的な教育を活動目標として明記する活動が増えてくる。さらに、その活動目標に「コミュニケーション力」や「伝える力」の促進を加える報告（町田1991（1）b, ピロッタ丸山1992（5）i 他）も見られるようになる（本稿末の参考資料2参照）。

このような変化の要因として以下のことが考えられる。第一に、ここ数十年間に視聴覚メディアが急速に発達したことで教室活動に

おける視聴覚教材の使用がより容易になったこと、第二に、視聴覚教材の利用によって以前より非言語情報を含む文化教育がしやすくなったこと、第三に、日本語教育界で当時、「コミュニケーション中心の教育方法の拡がり（西口2012）」が起こったことである。西口（2012）によれば、『日本語教育73号（1991）』で「コミュニケーション・アプローチをめぐって」という特集が生まれ、コミュニケーション中心の教育方法が取り上げられ、伝統的アプローチとの対比で熱気を帯びた議論が展開された。また横田（1996）は、留学生への異文化教育について、情動的側面への気づきを促す、より体験的な手法の開発が必要であると述べている。このような状況を背景にして、日本語教師たちは、従来の言語教育に重きをおいた伝統的な教育方法からの脱却、そして、多様な素材の特性を活かしコミュニケーション力促進に必須要素である文化教育をも目標に掲げた総合的な教育方法を模索し実践するようになったと推論する。

2. 2. 5 2000年代の分析

表1の「⑤2000年代」はさらに増えて17の実践例がある。そのジャンルの内訳は、TV関連のものや映画といった視聴覚素材を利用したものを中心に、マンガ、俳句、川柳、演劇シナリオなどがある。それら活動例の一部を以下に提示する。

- (1) TV関連の素材を利用したもの
 - a. (杉山2002) 学部1年生の中国圏留学生を対象に、学習者が選んだTVドラマを視聴して内容理解を深めその内容について話す活動
 - b. (渡嘉敷2004) 中級クラスで、発話や発声の自然さに焦点をあてて一般向けのTV短編ドラマを視聴する活動
 - c. (金庭2004) 一般的な日本語クラス（学部生、大学院生、研究生等）を対象に、TVニュースを視聴して必要な情報や時事問題の情報を収集し、その内容について説明する練習や会話する練習を通して聴解力と口頭能力を養成する活動
 - d. (小西他2002) 中上級レベルの留学生・日本人学生を対象に、TVコマーシャルを視聴し内容について討論する作業を通して、現代日本社会・日本人の価値観への理解・比較による母国理解を深めることなどを目標にした活動
 - e. (中居2001) あいづちに焦点をあててTVトーク番組¹¹を傾聴させる活動
- (2) 映画を利用したもの
- f. (山下2005) ジェスチャーや声の質（アクセントやイントネーションだけでなく、優しさやいらだちなどの感情を表現しうるquality of voice）等の非言語面の学習の手助けとして映画を視聴する活動
 - g. (鮎澤2009) 国際教養大学（秋田県）での中上級・上級レベルの短期留学生を対象にした「映画の中の日本人・日本語」クラスで、共通語と地域言語・秋田留学の意味・将来の進路などを考えることを目的に、いくつかの映画を視聴し、視聴後に感想文を作成し発表する活動
- (3) マンガを利用したもの
- h. (服部2006) 中上級以上の学習者を対象に、ストーリーマンガを読解し、内容理解を深める活動
 - i. (久野2007) 初中級および中級クラスで、4コママンガを見てピアと互い

¹¹ 本調査では「TVトーク番組」は「TVドキュメント」のジャンルに計上した。

のストーリーを伝え合う作業により、口頭表現力を促進することを目標にした活動

- (4) 俳句・川柳を利用したもの
 - j. (杉山2000) 中級以上のクラスで、俳句・川柳の基礎知識を学ぶ、俳句・川柳を創作し発表する、お互いの作品を鑑賞し合う、インターネットに自作の俳句を投稿するという作業を通して、異文化理解を深め、コミュニケーション力の促進を目標にした活動
 - k. (森田2009) 海外の中上級クラスを対象に、ピア・ラーニングを取り入れて川柳の鑑賞・創作・発表するという作業を通して、異文化理解を深め、学習者の主体性を引き出し、協働的な学習方法の定着を目的にした活動
- (5) 演劇シナリオを利用したもの
 - 1. (飯島2009) 日本事情クラスでのドキュメントドラマのシナリオ作成と演劇を通して多文化理解の促進と日本語力およびアカデミックスキルの促進を目標にした活動

上記のように、この年代には、生の素材のジャンルがますます広がりを見せていることが分かる。また、この年代の特徴として、海外でのJポップカルチャーへの関心の高まりと人気を受けて、それらを利用した言語および文化教育の実践活動が増えたことが挙げられる。特に、映画・マンガ・アニメといった娯楽要素の強いジャンルが日本語学習の動機付けになることから、日本語教材として注目されるようになったのはすでに周知のことである。本調査においても、この年代に抽出したジャンル別実践活動数のうち、映画・マンガ・アニメの占める割合は全体の約4割（9／22）となっている（表2参照）。

2006年度日本語教育学会春季大会において「映画・アニメ・マンガー日本語教育の映像素材ー」と題したシンポジウム¹²が開かれたこともこの状況の表れといえよう。このシンポジウムでは、これらを単なる大衆娯楽とみなさず各作品に含まれる言語・文化的要素を分析し、日本語教育での教材化の可能性について議論された。各パネリストは、現場で利用しやすいように映画シナリオやマンガの内容をジャンル別に分類しリスト化すること（窪田2006）、教師が内容を読み解くための基礎知識（カルチュラル・スタディーズ）の枠組みの必要性や授業での活用方法（西隈2006）等を提示している。

一方で、アニメやマンガの利用について消極的な指摘もあった。先述のシンポジウムで、パネリストの梁島（2006）は、海外で日本語を学ぶ高校生1100人へのアンケート調査結果から、授業でアニメやマンガを使いたがる傾向がある教師側に対して、学習者は授業ではアニメよりもその背後にある日本人の考え方や日本人らしさなどを学びたいと考えていると報告している。渡嘉敷（2004）による調査でも、アニメやマンガを教材として利用するときの作品の選び方について、学習者は日本語学習用の映像教材はつまらないと感じ、生の教材を好む傾向にあり、映画・アニメ・マンガなどに対する学習者の関心が日本語学習の動機付けになるというのは否めないが、一方で、アニメや子供向けの番組は教材として日本語学習者にそれほど人気があるわけではないという結果が報告された。

2. 2. 6 2010年代の分析

表1の「⑥2010年代」は15の実践例がある。

¹² 2006年度日本語教育学会春季大会シンポジウム要旨「映画・アニメ・マンガー日本語教育の映像素材ー」『日本語教育』（2006）131号 p55-58

(この数字だけを見れば、前年代よりも減少しているように思われるが、本調査は2016年度(2017年3月末)で終了しているため、2019年度まで調査期間を延長したならば増加の可能性が大きいことを断りおく。)

この年代にも様々なジャンルが利用されているが、新たに抽出されたものは落語の利用である。実践者の畑佐(2010)によれば、落語の小噺を口演させる活動は、「客を笑わせる」という明確なゴールが設定でき、また学習者は達成感を感じられる意味のある活動であると述べている。また、本調査では「演劇シナリオ」のジャンル内にカウントした杉山(2014)の活動においても、教材の一つとして落語が取り上げられている。杉山の活動は、中級以上の学習者を対象に、演劇的手法を用いて、落語、紙芝居、絵本の読み聞かせ、アニメやドラマの吹き替えなどを発表するという活動である。

このような演劇を利用した活動は近年、徐々に増え注目されているジャンルだと思われる。本調査においても、先述の杉山(2014)をはじめ、上級以上の学習者を対象に演劇によって学習者自身が会話の自然さに気づき、身振りなどの非言語的要素を含めた口頭能力の促進を目標にした活動(惟任2013)、中級レベルの日本語スピーキングクラスで日本語学習者と地元の日本人高校生との協働作業により日本語のスキットを作る活動(左治木2015)がある。杉山(2014)は、「ここ数年、日本語教育で「演劇的手法」に関心がもたれつつあり、平田オリザ¹³による教員のため

のワークショップが行われたり日本語教育向けのテキストや活動集が出版されたりしている。演劇的手法を取り入れた授業は、協働で課題に取り組み、声と身体表現を通して発表することで、4技能を主体的に学ぶ総合授業である。」と述べている。2012年開催の日本語教育国際研究大会(日本語教育学会主催)においても「地域社会における他言語多文化環境の創造をめざす日本語教育と演劇・ワークショップ」と題したパネルセッションが企画されており、日本語教育における関心の高さがうかがえる。そこでは、日本語教育関係者が多様な言語や文化背景を持った参加者たちとの芝居作りをしながら言葉とコミュニケーションについて思索と実践をしている演劇人とワークショップの可能性について討論された。

2.2.7 考察

ここまで、『日本語教育』における「生の素材を利用した実践活動」の変遷を見てきたが、近年の傾向として、様々な素材をそれぞれ多面的に利用した活動が増えていることが分かる(本稿末の参考資料2参照)。ここでの多面的な活動とは、様々な生教材の特性を活かして利用し、活動目標として言語・文化双方の「総合的な教育」を設定し、さらに一活動の目標に学習者間の「協働¹⁴」が加えら

¹³ 日本の劇作家、演出家。「現代口語演劇理論」という実践的で新しい演劇理論を提唱。2002年度以降中学校の国語教科書で、2011年以降は小学校の国語教科書にも平田のワークショップの方法論に基づいた教材が採用され、子どもたちが教室で演劇を創作する体験を行っている。(平田氏主催の劇団「青年団」公式HP、www.seinendan.org/hirata-oriizaより抜粋)

¹⁴ 本稿での「協働」の定義は池田(2007)に準拠する。池田は「協働には現在のところ「協働」「協同」「共同」「きょうどう」「コラボレーション」「コーポレーション」など、いくつかの異なる表記や類義語が用いられており同一分野の中でも統一されておらず、それぞれの概念についても明確な対応関係を打ち出したものは少ない。今のところ「きょうどう」については同一の表記だからといって特定の意味を持っていると見ることはできない。協働の定義についてもさまざまで、今のところ核となる概念要素を確定することは容易ではない。」と述べ、「協働学習」を「様々な場で実現される協働の学び」と定義している。尚、調査対象の記述の中に活動目標として「協働」(もしくはそれと同意の用語)の表記がなくても、その活動内容から本稿筆者が

れ、その活動の成果を外部に発信することで「コミュニケーション力」などの促進を目指す活動である。こうした傾向は、近年の実践報告中に「コミュニケーション力」「主体性」「伝える力」「批判力」「思考力」「共感」などのキーワードが実践者により活動目標として挙げられていることから分析できる。

新聞を利用した活動を例にとれば、1990年代の実践報告では、主に読解を中心として言語的側面や異文化理解の能力促進を目標にした活動（上山1990、町田1991他）であったものが、2010年代の報告では、従来の読解教材としての活用からさらに多面的な活用の仕方へと変化している。具体的にいえば、活動目標が従来の読解力や異文化理解力の促進だけにとどまらず、情報収集力、自己学習力、伝える力、コミュニケーション力などの促進をも目標にして、記事に関する感想を発表させたり協働で新聞を作成させたりという能動的な活動（宮2010、衣川2011他）へと進んでいる。

また、筆者が注目するジャンルは演劇を利用した活動である。本稿2.2.6で触れたが、演劇を利用した活動は2000年以降、増えつつあり、近年の傾向の一つと思われる。演劇の有効性については、本調査対象の『日本語教育』における実践報告に限っていえば、すでに奥村（1988）の報告があり、昨今、目新しいものとはいえない。奥村によれば、当時、京都外国語大学での5年間にわたる留学生による日本語劇の上演活動は、「協調性、興味、満足感、思い作りの点で予想以上の効果があり、劇のセリフや登場人物の人格などの理解が日本語授業での学習内容と結びつき、学習

者の自発性を伴ったクラス運営ができた。」と述べている。ここにも「主体性」や「協働」、「共感」といった側面の重要性が示されている。

このように演劇を利用した参加型の学習方法はまさしく「協働学習¹⁵」の形態の一つであり、ここで報告された効果は、2000年頃から日本語教育界で注目されるようになった「協働学習」の方法から得られる効果にも当てはまる。2000年後半頃から日本語教育界において演劇方法が注目されるようになったのは、特にこの協働学習の概念と結びついたためではないかと推測する。

この背景には、IT情報の急進、グローバル社会への突入など社会的情勢の変化に伴い、教育界全体がグローバル人材の育成を大きな目標に据えるようになったことがある。現に、文部省は、1989年（平成元年）に改訂された学習指導要領で、「新しい学力観」に基づいた学習指導を強調した。文部省提出の資料には、新しい学力観とは、「自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力を重視する学力観」とある。この学力観に立った指導に求められるものは、第一に十分な知識と技能、第二にそれらを基礎にして答えがひとつに定まらない問題に自ら解を出していく思考力、判断力、表現力などの能力、

¹⁵ 本稿での「協働学習」の定義は池田（2007）に準ずる。池田は「協働学習とは様々な場で実現される協働の学び」と定義し、日本語教育における協働に必要な5つの概念要素として「対等」「対話」「創造」「（協働の）プロセス」「互恵性」が必要であり、「多言語多文化社会を目指す日本語教育という位置づけのもとに、その構成員となる多文化背景の者同士の「①対等」を認め合い、互いに理解し合うための「②対話」を重ね、対話の中から共生のための「③創造」を生み出すものであるべきである。そして、協働することによって、ひとりで行っていた思考に、他者の視点が加わることでその「④（協働の）プロセス」が発展し、やがては共有の創造を生み出す。また協働する主体同士のかかわりのプロセスやその成果が両者にとって意義あるものとなるという「⑤互恵性」を持つていなければならない。」と述べている。

「協働学習」に相当すると判断した実践活動には「協働」を活動目標の一つと捉えた。例えば、演劇を取り入れた活動は協働行為がなければ成立しない活動である。

第三にそれらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、これらの育成である。そこで、教師側に、個に応じた指導、体験的学習、問題解決的な学習、ティーム・ティーチングなど協力的な指導を工夫することを推進している。これを踏まえ、学習形態も変わりつつある。文部科学省では2020年度から順次実施する次期学習指導要領に「アクティブ・ラーニング」を盛り込む見通しである。アクティブ・ラーニングとは、「学習者が議論を通じて答えを探究する学習形態で、米国で実践され、日本では大学で多く導入されている。学習者は知識だけでなく、思考力や表現力、主体性の獲得を目標にして、討論したり、自ら調べた内容を発表したりする¹⁶」。以上、これが2000年前後から現在までの教育界全体の主な流れである。

日本語教育界においても、学習者が多様化し、2001年以降には実践が一つの正解をめざして行われるものではないという論点が萌芽し（細川2008）、言語教育観の転換（池田・館岡2007）が起こった。つまり、実践者である教師の関心は、従来の知識伝達を中心に指導することから、学習者のコミュニケーション力の育成と自律的学習を支援すること（館岡2007）、学習主体の他者との社会的相互交流による創造的学習方法の実践（池田2007）へと移行した。このことは、1962年1号から2011年150号までの『日本語教育』に掲載された社会分野に関する論文¹⁷を分析した宇佐美（2012）の指摘にもある。宇佐美は「社会

的情勢の変化に伴い、研究動向（特に、対象とする学習者の属性や学習目的）も大きく変動し、単なる情報のやり取りを扱うだけでなくプロセスによってお互いにどのような変化が起こったか、どんなことに気づいていくことができるかという「実質的言語行動」のあり方をとらえようとする研究が増えている。」と述べている。本調査においても、近年の実践活動の形態や活動目標に上記で指摘されたような変化が見られる結果となった。

3 日本語教育における「落語」を利用した活動の位置づけと今後の展望

ここでは、落語を利用した日本語教育に関する先行研究を紹介し、落語を利用した活動の位置づけと今後の展望を述べる。

3.1 日本語教育における「落語」を利用した活動の位置づけ

本調査対象53例のうち、落語を利用した実践活動は畑佐（2010）による落語の小噺を利用した活動1例のみであった（本稿2.2.6参照）。落語に限らず、他のどの素材についても、現実にはより多く実践が試みられていると思われるが、それらすべてを調査するのは限界があると判断したため、今回は『日本語教育』を中心に掲載された活動報告に絞って調査対象とした結果である。

私見では、日本語教材としての落語に注目した先行研究はまだそれほど多くない。実践例を挙げると、海外の大学においては、米国ミドルベリー大学夏期日本語学校で2007年より毎年行われている、初級レベルからの学習者を対象に、小噺口演を目標にした活動（畑佐2009a）や、米国コロンビア大学での上級・超級レベルを対象に、表現力・言語運用・談話技能・達成感・学習者間のインターアクション・笑いの文化理解などを目標にした落

¹⁶ 「アクティブ・ラーニング」については、読売新聞（2015.12.4）14面（くらし教育面）を参考にした。

¹⁷ 宇佐美が分析した「社会分野に関する論文」とは「社会との関わり」を扱った論文を意味し、論文のタイトル・キーワードに「社会」との何らかの意味で関わりを持つと思われる論文を抽出し、それらを「場面と言語運用」「文化」「社会情勢と学習」の3つのカテゴリーに分類し、概観している。（宇佐美洋2012「『社会』分野－研究観の再考と拡張を促すための原動力として－」『日本語教育153号』）

語口演活動（入野2012）がある。国内においては、お茶の水女子大学の上級レベルを対象に、4技能の上達と日本文化理解の促進を目標にした小噺口演活動（畑佐2009b）、筑波大学の中上級レベルを対象に2001年より続けられている落語鑑賞活動（酒井2001）、筑波大学の上級レベルを対象とした聴解授業での落語小噺指導と落語創作のワークショップ活動（酒井2012）¹⁸などがある。

また、日本語学習者を対象にグローバル人材育成を目指し「伝える力」を養う教材としての落語の可能性を考察した研究（川崎2014）、落語の小咄¹⁹を利用して個別に学習可能なCALL（computer-assisted language learning）プログラムを作成し試行する取り組み（酒井・山田2016）がある。川崎（2014）は、「落語は「古い日本の娯楽」というイメージがあり社会のニーズと対極的位置にある学習素材であると思われがちであるが、落語が話芸であることに注目すればグローバル人材に必要な「伝える力」を養うための教材となりうる。落語の稽古の手法に注目し、落語の表現の古さや難しさをわかりやすく伝える工夫をするための訓練の材料として、学習者自身が伝える工夫をすることで、「落語の授業」が単に言語知識の場ではなく「伝える姿勢を養う場」となり、それはグローバル人材育成教育そのものである。」と述べている。酒井・山田（2016）は、「落語は優れた日本語教育教材となりうるが日本語学習者にとって背景知識や掛け言葉などの理解が難しい点がある」ことを考慮し、落語の導入として小咄を

取り上げ、学習者が小咄を理解できるように個々に学習するe-ラーニングとしてCALLプログラムを開発・試行している。このプログラムでは、学習者はまず小咄を選択し、その映像を字幕なしで視聴し、次にそれに関するクイズに答え、結果を確認し解説で学び、最後にスクリプトを見ながら再視聴するという流れで進められる。また、このプログラムは、学習者が映像を視聴しながら「面白い」「難しい」と感じた箇所をクリックすることで感覚を量的データとして可視化する方法としても開発されており、これによって学習者の落語の笑いに対する見方を分析することもできる。

これらの実践や研究は、「（落語は）日本の伝統芸能の中でも「話芸」であることから、歌舞伎や能などに比較して日本語さらに日本語学習に極めて近いところに位置づけられるが、学習者の間での知名度は他の伝統芸能に比べてかなり低い（畑佐2009a）」、「言語面に注目すると落語で使用される言語の特殊性が際立ち、文化面に注目すると“古い日本の娯楽”の意味が際立つ（川崎2014）」という落語の持つ固定観念化したマイナスイメージを払拭し、「日本語」で成立している落語の持つ特徴を日本語教材として多面的に分析し利用したものである。

上記の先行研究からも分かるように、日本語教材としての落語の利点は多くある。例えば、言語的側面として、登場人物の話し方から上下関係や役割語など異なるスピーチスタイルの理解、口演活動によるジェスチャーを伴った口頭能力の促進、落語鑑賞による聴解能力の促進などが挙げられる。文化的側面として、習慣や風習など歴史的な事柄も含めた日本文化が導入できる、落語鑑賞や口演など体験的学習ができるなどが挙げられる。また、その他の側面として、落語の登場人物は市井

¹⁸ この活動は、2012年日本語教育国際研究大会パネルセッション「落語がわかるということー言葉と文化の側面からー」において、パネリストの酒井たか子氏によって報告されたものである。

¹⁹ 落語の導入部（まくら）に用いる短い話を意味する「こぼなし」の表記には「小話」「小咄」「小噺」がある。ここでは酒井が採用した「小咄」で記述する。

の人々が多いので国籍を問わず人間性などに共感できる、笑いを伴ったりリラックスした学習環境が作り出せる、口演活動により言語的および非言語的学習項目を身体を通して繰り返し学習できる、口演活動により表現力やコミュニケーション能力が促進する、口演活動により自律学習や協働学習に貢献できる、口演発表に向けて主体的に学ぶ場を提供できるなどが挙げられる。

このような観点から、これら落語の利点を活かした活動は、本稿2.2.7で触れたアクティブ・ラーニング型活動であり、「新しい学力観」に基づいた日本語教育の潮流に沿ったものであると位置づける。

3. 2 今後の展望

先にも述べたが、日本語教育において、言語および文化の総合的教育の教材として落語を利用する活動や研究はまだそれほど多くはない。しかし、現在は空前の落語ブームである。それはTVの長寿番組「笑点」の人気ぶりにも現れている。NHK-TV『クローズアップ現代+』（2016.10.19放送分「平成落語ブーム」とかけて若者と解くその心は!?）)によれば、現在は江戸時代以来の落語ブームであり、落語家の総数は江戸時代以来最多の約800人、落語イベントや寄席には20、30代の若者の姿が目立つという。番組中のインタビューで、若者たちは落語の良さについて「笑ったり、泣いたり、感動したり、いろいろな気持ちになれる」、「ネット文化が浸透しているが、その中で忘れていた日本のよいものとか粹な感じをたしなみたい」、「ふだんの生活にはない濃密な人間関係が魅力」などと答えている。同番組の解説者たちは、この状況を「人間関係など古き良き日本にあるものを知りたがっている」、「落語の登場人物を通していろいろなもの見方ができる」、「ネッ

ト文化の中で話し上手になりたがっている」、「落語はクールジャパンの一つ」などと分析している。このブームの背景には、落語が伝えるものの中に、単に話の内容や面白さだけではなく、脈々と受け継がれてきた日本人の深層的な考え方や感覚性（例えば、宗教観や上下関係、遠慮、人との距離感覚など）が存在していて、現代人である聞き手（聴衆）はそれを理解し共感したがつているのではないかと推測する。

落語と日本語教育との関係でいえば、日本語教育界が落語に関心を示しつつあることの表れとして、以下2例を提示する。2012年日本語教育国際研究大会²⁰では「ことばでつながる新たな世界」をテーマに、落語を日本語教育の視点から考える趣旨で落語会が企画され、また先述の酒井氏らによるパネルセッション「落語がわかるということー言葉と文化の側面からー」において、聞き手（学習者）が落語をどのように受けとめ理解するのか、落語の面白さを理解させるためのサポートの仕方が討論された。2016年日本語教育国際研究大会で企画されたパネルセッション「面白い話」で世界をつなごう」では、日本語教育グローバルネットワークによる「面白い話」で世界をつなぐプロジェクト」が紹介された。定延（2016）によれば、このプロジェクトは「面白い話を好む」という人間の最も根源的な心性を利用して、世界中の日本語学習者どうし、また日本語学習者と日本語母語話者を日本語でつなぐ場を提供するために、日本語で有志（母語話者・学習者を問わない）に「面白い話」をしてもらい、それを

²⁰ この大会は日本語の教育と研究について、国境、地域を越えた協力と情報交流を推進することを目指して日本語教育学会が隔年で主催する国際研究大会である。（2016年9月現在：インドネシア、カナダ、韓国、豪州、米国、台湾、中国、ニュージーランド、香港、ヨーロッパ、日本の11カ国・地域）（参考：日本語教育学会方式HP）

音声・動画で収録し、インターネット上で公開する」というものである。ここで収録・公開され「面白い話」の音声動画は、学習者の口頭コミュニケーション能力向上のためにオンライン教材として利用可能なほか、日本語と学習者の母語のスピーチスタイルや、国別による「ユーモア・笑話」に関する比較研究データとしても活用可能であるという。このプロジェクトが示す「面白い話」をすぐに落語と結びつけてしまうのは強引であるという見方もあるが、笑話である落語の特性を考えれば、あながち的外れでもなかろう。このプロジェクトに参加することを目標に落語素材を利用した実践活動を試みることもでき、落語素材の多面的な広がりがさらに期待できる。

以上、ここでは日本語教材としての落語への関心が高まりつつあるという状況を提示した。さらにその有効的な利用方法を探り実践に活かすことが今後の課題である。

参考文献

- 池田重（1968）「米国の大学における日本語教育の特色」『日本語教育』11号p37-45 日本語教育学会
- 池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 宇佐美洋（2012）「『社会』分野－研究観の再考と拡張を促すための原動力として－」『日本語教育』153号p55-70 日本語教育学会
- 川崎加奈子（2014）「『落語』と『グローバル人材育成』－伝える力を養う教材としての落語の可能性－」『長崎外大論叢』（18）p41-54
- 窪田守弘他（2006）「映画・アニメ・マンガ－日本語教育の映像素材－」『日本語教育』（2006）131号 p55-58 2006年度日本語教育学会春季大会シンポジウム要旨
- 酒井たか子（2001）「中上級日本語学習者が落語を通して学べるもの」『日本語教育方法研究会

- 誌』8（2）p14-15
- 酒井たか子・ブシュネル・ケード他（2012）「落語がわかるということ－言葉と文化の側面から－」『2012年日本語教育国際研究大会予稿集』p12-13日本語教育学会
- 酒井たか子・山田亨（2016）「〈報告〉落語・小咄を利用した日本語学習支援CALLプログラムの開発・試行」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31号p69-80
- 定延利之他（2016）「『面白い話』で世界をつなごう」『2016年日本語教育国際研究大会予稿集』日本語教育学会
- 西口光一（2012）「『教育』分野－日本語教育研究の回顧と展望－」『日本語教育』153号 p8-23 日本語教育学会
- 入野野みはる（2012）「『落語』で学ぶ日本語－落語活動、七年の歩み－」『2012日本語教育国際研究大会予稿集』p314
- 畑佐一味（2009a）「落語の小咄を利用した日本語および日本文化教育の評価と支援システムの構築」『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』p261-264
- （2009b）「成果報告書：落語の小咄を利用した日本語および日本文化教育の評価と支援システムの構築」
- www.hahuhofoundation.or.jp/Portals/O/resources/.../04_01.pdf
- 春原憲一郎他（2012）「地域社会における他言語多文化環境の創造をめざす日本語教育と演劇・ワークショップ」『日本語教育国際研究大会名古屋2012』p50-51
- 細川英雄・ことばと文化の教育を考える会編（2008）『ことばの教育を実践する・探究する活動型日本語教育の広がり』凡人社
- 横田雅弘（1996）「留学生教育交流と異文化間教育学」『異文化間教育』10号p44-58 異文化教育学会
- 文部科学省
「新しい学力観に立つ教育の推進」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199601/hpad199601_2_082.html

本稿で調査分析対象とした参考文献

1. 〈日本語教育学会誌『日本語教育』掲載のもの〉
 注：日本語教育学会誌『日本語教育』は、1号（1962）～31号（1976）を「外国人のための日本語教育学会」、32号（1977）～最新号を「社団法人日本語教育学会」が発行している。

鮎澤孝子（2009）「映画を使った日本語教育－日本語上級レベル短期留学生を対象として－」141号p114

安藤淑子（1979）「VTRを使用した授業報告」38号p64-68

池田伸子・金城尚美（1996）「日本語教育用ハイパーメディア教材の開発－日本の昔話をを用いた日本語学習支援システム－」91号p173-174

上迫和海（1993）「初級後期学習者への俳句指導」80号p185

上宮真理子（1994）「初級文学授業の一例」82号p173

上山民栄（1990）「アメリカの大学における日本語「上級」の問題点と提案」71号p56-68

奥山訓代（1988）「留学生と日本語劇」66号p244
 —（1989）「日本語教育におけるT・Vプログラムの利用」68号p228-235

金庭久美子（2004）「リソースの活用を目指した授業－ニュース教材を利用した聴解授業－」121号p86-95

衣川友紀子（2011）「他者に伝わる口頭表現を目指した実践と課題－学部留学生を対象として－」149号p39

小西光子・島弘子（2002）「テレビCMを使った異文化授業の試み」113号p82

酒井董美（1999）「民話を生かした授業～「日本事情」の展開例として」102号p100

佐久間勝彦（1979）「テレビ・ドラマ使用による上級日本語教科書編集の試み」39号p101-113

佐藤路子（1995）「俳句を教える－日本語教育の立場から－」86号p154-161

杉山純子（2000）「日本語クラスでの俳句・川柳指導の関する考察」107号p168
 —（2002）「『僕が僕であるために』を使ったドラマ視聴授業」115号p152

渡嘉敷恭子（2004）「ドラマを使った教材の開発－中級クラスの場合－」122号p97

中居順子（2001）「あいづちのバラエティーに気

付かせる教室活動－テレビのトーク番組を使った積極的傾聴スキルのトレーニング－」111号p147

中川経治（1994）「日本事情教授法・一つの実験」82号p194

畑佐一味（2010）「落語の小噺を利用した日本語および日本文化教育の評価と支援システムの構築」144号p199

服部真子（2006）「(実践報告)日本語教育でストーリーマンガを扱った読解授業の試み－中上級のクラスにおいて－」131号p104

原土洋（1988）「日本事情のとらえ方－東北大学教養部の場合－」65号p30-40

ピロッタ丸山淳他（1992）「総合的な理解力を育てるVTR教材－大学の講義を聞くことを中心として－」76号p146

古谷美佐子（1996）「VTR「浦島太郎と庄内半島と沖縄」「リップ・バン・ウィンクル」－地域に根ざした視聴覚教材の開発について－」89号p161

町田敬子（1991）「新聞記事を主教材にした日本語教育」73号p219-220

松田摩耶子（1967）「州立ワシントン大学の日本語集中講座」10号p33-41

山下好孝（2005）「日本語教育におけるDVDビデオの利用について」125号p176

吉岡英幸「視聴覚教育の実例」『日本語教育』38号p55-63

2. 〈『日本語教育学会予稿集』掲載のもの〉
 左治木敦子（2015）「日本語学習者（留学生）と日本人高校生によるドラマの手法を用いた協働作業の実践報告」『2015年度日本語教育学会秋季大会予稿集』p399-400

宮弘美（2011）「NIE授業が学習者に与える効果について－学習意欲と学びの変容を分析する－」『2011年度日本語教育学会春季大会予稿集』p268-273

3. 〈日本語教育学会公式HP WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』掲載のもの〉
 飯島有美子（2009）「日本事情クラスにおけるドキュド라마の導入とその効果－社会問題への理解深化とレポート作成のための水路付け－」
 久野由宇子（2007）「ピア・ラーニングを取り入

れて口頭表現力を伸ばす方法を探る－「4コマ漫画のストーリーをピアに伝えるタスク」の試み－」

惟任将彦（2013）「演劇授業の可能性－『ドラマチック日本語コミュニケーション』を使って－」
杉山ますよ（2014）「演劇的手法を取り入れた活動の可能性」

森田衛（2009）「ピア・リーディングとピア・レスポンスの有機的なサイクルを目指して－川柳を教材にした授業から見えてくるもの－」

参考資料2 [表『日本語教育』における生の素材を利用した実践活動(年代順) 一覧]

No.	論文タイトル
1	州立ワシントン大学の日本語集中講座
2	視聴覚教育の実例
3	VTRを使用した授業報告
4	テレビ・ドラマ使用による上級日本語教科書編集の試み
5	日本事情のとらえ方－東北大学教養部の場合－
6	留学生と日本語劇
7	日本語教育におけるT・Vプログラムの利用
8	アメリカの大学における日本語「上級」の問題点と提案
9	新聞記事を主教材にした日本語教育
10	総合的な理解力を育てるVTR教材－大学の講義を聞くことを中心にして－
11	初級段階でのニュース教材の導入
12	初級後期学習者への俳句指導
13	日本事情教授法・一つの実験
14	初級文学授業の一例
15	俳句を教える－日本語教育の立場から－
16	初級・中級コースに取り入れた学習者中心のプロジェクト「スキット」の効果について
17	VTR「浦島太郎」「浦島太郎と莊内半島と沖繩」「リップ・バン・ウィングル」－地域に名指した視聴覚教材の開発について－
18	日本語教育用ハイパーメディア教材の開発－日本の昔話をういた日本語学習支援システム－
19	ドラマを用いた総合的教室活動－思考力を活用した教室活動の有効性－
20	読解教材を応用した会話練習－エッセイの登場人物になって会話する試み－
21	民話を生かした授業～「日本事情」の展開例として
22	放送番組を素材とする静止写真教材の試作と試用について
23	日本語クラスでの俳句・川柳指導に関する考察
24	コンピューターに取り込んだニュース教材
25	初級後半から中級への橋渡しのための教室活動－4コママンガを利用したストーリー作成タスクの試み－
26	あいづちのパラエティに気付かせる教室活動－テレビのトーク番組を使った積極的傾聴スキルのトレーニング－
27	テレビCMを使った異文化授業の試み
28	『僕が僕であるために』を使ったドラマ視聴授業－教室活動の実際と内省結果－
29	リソースの活用を目指した授業－ニュース教材を利用した聴解授業－
30	ドラマを使った教材の開発－中級クラスの場合－
31	日本語教育におけるDVDビデオの利用について
32	(実践報告) 日本語教育でストーリーマンガを扱った読解授業の試み－中上級のクラスにおいて－
33	ピア・ラーニングを取り入れて口頭表現力を伸ばす方法を探る－「4コマ漫画のストーリーをピアに伝えるタスク」の試み－
34	米国人学生の文化理解能力を助長するための創造的な日本語教育の取り組み
35	ニュース視聴を主活動にした上級会話授業－大学生として日常会話に参加するスキヤフォールディング－
36	映画を使った日本語教育－日本語上級レベル短期留学生を対象として－
37	ピア・リーディングとピア・レスポンスの有機的なサイクルを目指して－川柳を教材にした授業から見えてくるもの－
38	日本事情クラスにおけるドキュド라마の導入とその効果－社会問題への理解深化とレポート作成のための水路付け－
39	落語の小断を利用した日本語および日本文化教育の評価と支援システムの構築
40	NIEを導入した日本語授業－日本語教育における新聞の多面的な活用の可能性－
41	ドラマを利用した日本語・日本文化教育のための教材と授業デザイン－言語と文化の統合を目指して－
42	他者に伝わる口頭表現を目指した実践と課題－学部留学生を対象として－
43	アニメ・マンガの日本語授業への活用
44	NIE授業が学習者に与える効果について－学習意欲と学びの変容を分析する－
45	4コマ漫画を題材とした留学生と日本語教員養成課程履修学生との間の学びの可能性
46	生教材を使った発話を促す授業－ビジネス語彙・表現の習得を目指して－
47	日本事情的授業における「読解」のための教室活動－ブレインストーミングのグループワークを用いて－
48	学習者オートノミーの育成－「映像で学ぶ日本語」の授業実践からの考察－
49	演劇授業の可能性－『ドラマチック日本語コミュニケーション』を使って－
50	演劇的手法を取り入れた活動の可能性
51	日本語学習者(留学生)と日本人高校生によるドラマ的手法を用いた協働作業の実践報告
52	比べ読みを軸にした絵本の翻訳活動－韓国の大学生の気づきに注目して－
53	初級レベルから始める俳句学習－対話重視の教育実践－

生の素材（落語を含む）を利用した実践活動の変遷と動向（森 真由美）

No.	筆者名	出版年	号数	掲載の形式	ジャンル
1	松田摩耶子	1967	10	論文	映画
2	吉岡英幸	1979	38	論文	ラジオニュース・TVニュース・ドキュメント・ドラマ
3	安藤淑子	1979	38	論文	TVドキュメント
4	佐久間勝彦	1979	39	論文	TVドラマ
5	原土洋	1988	65	論文	TVドキュメント
6	奥村訓代	1988	66	発表要旨	演劇シナリオ
7	奥村訓代	1989	68	論文	TVアニメ
8	上山民栄	1990	71	論文	新聞、小説、エッセイ、ドラマ
9	町田敬子	1991	73	発表要旨	新聞
10	ピロッタ丸山淳他	1992	76	発表要旨	大学の講義（VTR）
11	岡崎志津子	1993	79	論文	ラジオニュース
12	上迫和海	1993	80	発表要旨	俳句
13	中川経治	1994	82	発表要旨	新聞
14	上宮真理子	1994	82	発表要旨	詩・短歌・小説・歌
15	佐藤路子	1995	86	論文	俳句
16	フォード史子	1995	87	発表要旨	演劇シナリオ
17	古谷美佐子	1996	89	発表要旨	絵本・昔話（VTR）
18	池田伸子・金城尚美	1996	91	シンポ要旨	昔話（VTR）
19	新川以智子	1998	98	発表要旨	TVドラマ
20	阿部淳子	1999	100	発表要旨	エッセイ
21	酒井薫美	1999	102	発表要旨	民話
22	古谷美佐子・鶴尾能子	2000	106	発表要旨	TVドキュメント
23	杉山純子	2000	107	発表要旨	俳句・川柳
24	堀田峰紫子	2001	110	発表要旨	TVニュース
25	高橋亜紀子	2001	111	発表要旨	マンガ（4コマ）
26	中居順子	2001	111	発表要旨	TVドキュメント（トーク番組）
27	小西光子・島弘子	2002	113	発表要旨	TVCM
28	杉山純子	2002	115	発表要旨	TVドラマ
29	金庭久美子	2004	121	論文	TVニュース
30	渡嘉敷恭子	2004	122	発表要旨	TVドラマ
31	山下好孝	2005	125	発表要旨	TVドラマ・アニメ・映画
32	服部真子	2006	131	発表要旨	マンガ（ストーリー）
33	久野由宇子	2007	フォ	論文	マンガ（4コマ）
34	松本浩史	2008	フォ	論文	映画・アニメ・歌・読み教材・マンガ
35	舟橋宏代	2008	フォ	論文	TVニュース
36	鮎澤孝子	2009	141	発表要旨	映画
37	森田衛	2009	フォ	論文	川柳
38	飯島有美子	2009	フォ	論文	演劇シナリオ
39	畑佐一味	2010	144	発表要旨	落語
40	宮弘美	2010	144	ボス発表要旨	新聞
41	保坂敏子・Gehrtz三隅友子	2011	148	ボス発表要旨	TVドラマ
42	衣川友紀子	2011	149	発表要旨	新聞
43	川嶋恵子・熊野七絵	2011	フォ	論文	TVアニメ・マンガ
44	宮弘美	2011	春大会予稿集	発表要旨	新聞
45	上田安希子・石塚京子他	2011	春大会予稿集	ボス発表要旨	マンガ（4コマ）
46	関かおる・酒井祥子他	2012	フォ	論文	TVニュース・TVドキュメント
47	印藤緑	2013	フォ	論文	小説
48	阿部祐子	2013	フォ	論文	映画
49	惟任将彦	2013	フォ	論文	演劇シナリオ
50	杉山ますよ	2014	フォ	論文	演劇シナリオ
51	左治木敏子	2015	秋大会予稿集	ボス発表要旨	演劇シナリオ
52	小松麻美	2016	春大会予稿集	論文	絵本
53	嶋田和子・落合知春他	2016	春大会予稿集	論文	俳句

No.	活動形態	活動目標1：言語的側面
1	映画視聴	
2	視聴覚教材とその使用法	語彙・文型・視聴解・口頭
3	TV番組視聴	視聴解・口頭
4	ドラマ視聴「となりの芝生」 聴解 話しことば	視聴解（特に話し言葉の理解）
5	テレビVTR視聴・日本事情	
6	劇（童話・時代劇・現代劇）	口頭
7	TVアニメ「サザエさん」視聴	語彙・文法・視聴解・口頭・内容理解
8	新聞・小説・エッセイ・ドラマ	読解・聴解
9	新聞	4技能
10	VTR視聴・大学の講義・内容理解	4技能
11	ラジオニュース	語彙・聴解
12	俳句鑑賞、制作	読解・音調
13	新聞10大ニュース・日本事情	
14	文学作品読解	語彙・読解・作文
15	俳句を作って楽しむ	音調（リズム）
16	劇（スキット）台本作成	作文・口頭・聴解
17	昔話VTR視聴・内容理解	
18	昔話VTR視聴・内容理解・メディア教材開発	語彙・視聴解
19	ドラマ視聴・内容理解・発表	表現・口頭・視聴解
20	読解・会話文作成・発表	読解・作文・口頭
21	VTR視聴・録音資料・日本事情	
22	TV番組静止写真・音声テープ・ナレーションスクリプト・内容理解	視聴解・語彙
23	俳句鑑賞・制作	読解・音調
24	ニュース視聴・内容理解	語彙・文法・視聴解
25	4コママンガストーリー作成	既習文型の運用力・作文
26	視聴	視聴解
27	CM視聴・討論・異文化理解	
28	VTR視聴・内容理解・発表・感想文	語彙・口頭
29	ニュース視聴	語彙・文法・表現・聴解・口頭
30	短編ドラマ視聴・内容理解	語彙・視聴解（特に自然な話し言葉）
31	VTR視聴	視聴解（特に音調・（感情を表す）声の質）
32	マンガ読解・内容理解	読解
33	4コママンガ読解	読解・口頭
34	米大学4年生向け日本文化講座	
35	VTR視聴	視聴解・口頭
36	映画視聴・感想文・発表	表現・作文・口頭
37	川柳鑑賞・創作	読解・作文
38	ドキュドラマ制作・日本事情・発表	4技能
39	小唄口演	口頭
40	新聞読解・感想文・発表	4技能
41	ドラマ視聴	語彙・視聴解・口頭
42	意見発表	聴解・口頭
43	アニメ・マンガ視聴	読解・視聴解・口頭
44	新聞読解・新聞制作	4技能
45	4コママンガ読解・作文交流	読解・作文
46	VTR視聴・日本事情	語彙・表現・口頭
47	小説読解・日本事情・スキット発表	読解・口頭
48	映画視聴・映像作品作成	4技能
49	劇	口頭
50	劇（落語・読み聞かせ・紙芝居・アニメドラマ吹き替え等）	4技能
51	シナリオ作成・演劇	語彙・表現・口頭
52	絵本翻訳	表現・読解
53	俳句作成・発表・コンテスト	語彙・表現・音調（リズム）

生の素材（落語を含む）を利用した実践活動の変遷と動向（森 真由美）

No.	活動目標2：文化的側面	その他の活動目標	レベル	場所
1	異文化理解		初級～	アメリカ
2			初級	日本
3			中級	日本
4			上級	アメリカ
5	異文化理解		大学留学生	アメリカ
6	異文化理解（しぐさ・習慣）	協働 動機づけ	課外活動	日本
7			初級～	日本
8	異文化理解		上級	アメリカ
9	異文化理解（+日本人の思考）	コミュニケーション力	上級	オーストラリア
10	異文化理解	コミュニケーション力	上級	日本
11			初級	日本
12	異文化理解	動機づけ 体験的認識	初級後半	日本
13	異文化理解		一般教養クラス	日本
14	異文化理解		初級	日本
15			初・中級	日本
16	異文化理解	協働 主体性	初中級～	アメリカ
17	異文化理解		初～中上級	日本
18	異文化理解	動機づけ	初級後半～	日本
19		思考力 伝える力	上級	日本
20		協働 動機づけ		ポーランド
21	異文化理解			日本
22			初級～	日本, ベトナム
23	異文化理解	協働 コミュニケーション力 体験的認識	中級～	日本
24	異文化理解	能動的活動	初級中・初級上	アメリカ
25		伝える力	初級後半～	日本
26	異文化理解（あいづちのしぐさ）			
27	異文化理解		中上級	日本
28	異文化理解			日本
29		伝える力		
30			中級	日本
31	異文化理解（しぐさ）			日本
32			中上級	日本
33		協働 伝える力 笑い 共感	初中～中級	日本
34	異文化理解		上・超級	アメリカ
35	異文化理解		中上級	日本
36	異文化理解	協働	中上・上級	日本
37	異文化理解	協働 主体性 ユーモア 共感	中級	エジプト
38	異文化理解	協働 コミュニケーション力 思考力 伝える力 情報収集力	上級	日本
39	異文化理解	達成感	初級～	アメリカ
40	異文化理解	協働 コミュニケーション力 思考力 伝える力 メディアリテラシー	中上級	日本
41	異文化理解	協働 コミュニケーション力 主体性・自律性	中上級	日本
42		伝える力		日本
43			初～中級	日本
44	異文化理解	協働 コミュニケーション力 思考力 メディアリテラシー 問題発見解決力	中上級	日本
45	異文化理解	協働 動機づけ コミュニケーション力 共感 言語的気づき		日本
46		協働 伝える力	初級～上級	日本
47	異文化理解	協働 発想力 発信力	中級～上級	日本
48	異文化理解	協働 コミュニケーション力 主体性 学習オートノミー	中上級	日本
49	異文化理解（しぐさ・表情・間・対人間距離）	協働	上～超級	日本
50	異文化理解（しぐさ）	協働	中～上級	日本
51	異文化理解	協働	中級	日本
52	異文化理解	協働 批判力 言語的・文化的気づき		韓国
53		協働 動機づけ 伝える力 共感	初級～	日本

《表の見方》

- 1) 「号数」欄～「数字」は『日本語教育』の号数, 「フォ」はWEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』, 「春／秋大会予稿集」は日本語教育学会発行の『大会予稿集』を表す。
- 2) 「掲載の形式」欄～「論文」「発表要旨」「シンポジウム要旨」「ポスター発表要旨」の4つに分類した。
- 3) 「活動目標1：言語」欄～言語的側面に関する活動目標として明記されているもの, または記述内容から本稿筆者がそれと判断した目標を記載した。言語教育について特に目標としての記述がないものは空欄とした。
- 4) 「活動目標2：文化」欄～文化教育を活動目標として明記しているものを「異文化理解」として記載した。教室活動に「生の素材」を利用することは, 当然, 文化教育と切り離すことはできない。しかし, 実践報告中に, 特に文化教育を活動目標の一つとして設定した記述がないものは, ここでは空欄とした。
- 5) 「その他の活動目標」欄～「活動目標1：言語」「活動目標2：文化」以外の活動目標として記述のあるもの, または記述内容から本稿筆者がそれと判断したもの。例えば, 演劇活動における「協働」は必須要素であり, 調査対象の記述にそれに関するキーワードがなくても, 本表中の活動目標欄には「協働」と表記を加えた。筆者による「協働」に関する判断基準は池田・館岡(2007)に準ずる。
- 6) 「レベル」欄, 「場所」欄～それぞれについて記述がないものは空欄とした。